

石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで栄えた街」として知られていた。しかし時代の推移によつて街の中心は花畔、樽川（花川）地区に移り、今日では弁天歴史通りや石狩浜海水浴場あそび場、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海水面に於ける定置網漁の一漁法のみによつて操業されているが、昭和三〇年までは、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取り上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五場所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として観光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

一 漁業の名称

石狩川鮭地曳網漁

二 漁獲物の種類

鮭

三 漁業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

四 操業期間

走り漁 自九月一日 至一〇月三十一日
後取り漁 自一月二十五日 至二月末日

五 操業場所 石狩川

大正後期から昭和三〇年まで

- 一 ヤウスハ場所 廃止 昭和初期
- 二 ニ真掬 〃 昭和六年頃
- 三 下真掬（渡船場上） 廃止 昭和一三年

注 昭和一五年〜同十八年まで地曳網名義で日中、一臺の磯舟で流網漁を行う。

昭和三〇年前半、漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四・五年で中止。

- 四 若生 場所（渡船場下） 廃止 昭和一五年
- 五 柳神 場所（呼称ホリカムイ） 〃 昭和三〇年
- 六 来札 場所（中州） 〃 大正末期

注 左岸昭和七・八年頃再開したこともある。

- 七 燈台下場所 廃止 昭和四年頃



六 漁具の状況

これについては、漁場(山幅・水流・流れの強弱)によって、網丈・長さに相違あり。

本項では福神威場所を基準とする。

昭和一〇年代

地曳網漁は出網、袋網(スド)、入網(他出網・入網)からなる全長二五三尋(二二八メートル)によって構成されている。一脇即ち袋網に連接するところの網丈は、七尋(一〇・五メートル)、袋網(スド)は太三本字、二寸八分(八・四センチ)長さ八尋三尺(二二・九メートル)袋底に魚を追いつめて開放するため先端を網(ロープ)で結び、その網を一〇尋(一五メートル)程度としその最先端浮子にを付ける。袋網の位置に烏帽子型の浮子(神威浮子)を付け目印とする。(曳網の中心を一目で判別出来るため)

一 出網

長さ五六尋(八四メートル)、網丈七尋(一〇・五メートル)河水の増水によって二脇部をはずす。

(一) 一脇、本三本字、三寸目(九センチ)長さ二四尋(三六メートル)

(二) 二脇、太三本字、四寸目(一二センチ)長さ三三尋(四八メートル)

① あは浮子な手網(径五分(一・五センチ)のロープ)

② メクグリ 径一分五厘(〇・四五センチ)麻糸。一割の奇せを入れ上下共同し長さにする。

③ 沈子手網 手網径五分五厘(一・六五センチ)のロープ。

④ 浮子(昭和一〇年頃 横前加藤船屋で作成)

木製(樺松)長さ一尺四寸(四二センチ)幅四寸(一二センチ)厚さ、中真一寸四分(四・二センチ)両端五分(一・五センチ)その両端に穴を開け「アバ」をこれに通して浮子手網に結びつける。

一脇は八寸(二四センチ)間に隔て、一枚付け、二脇は九寸(二七センチ)一尺二寸(三六センチ)に一枚付ける。

(三) 沈子手網の沈子

網目は鉛製で一個、量目二五匁(〇・九キロ)之を一脇八寸(二四センチ)間隔に一個

二脇は一尺(三〇センチ)間隔に一個を付ける。

(四) 筋繩 径三分(〇・九センチ)の麻繩。長さ四尋(六メートル)を用いる。

(五) 立網 上網は径六分(一・八センチ)のロープ。

長さ三尋(四・五メートル)で浮子手網に連なり、下網は径六分のロープで長さ五尋(七・五メートル)沈子手網に連なる。この量網を「ツボ」に含す。

二 入網

長さ九六尋(一四四メートル)網丈七尋(一〇・五メートル)

(一) 一脇から四脇まであり、長さ夫々二四尋(三六メートル)網目、一脇太三本字三寸目(九センチ) 二脇太三本字 四寸目(一二センチ) 三脇、四脇共三本字 五寸目(一五センチ)

子とする。

- ① 浮子手綱 径五分(二・五センチ)のロープ。
- ② 沈子手綱 径四分(二・二センチ)のロープ。
- ③ メクグリ 径二分五厘(〇・四五センチ)の麻糸。

一割の寄せを入れて上下共同し長さとする。

注 河水の増水で三・四脇をはずす。

- ④ 浮子 出網と同じ。

㊦ 網足 鉛製、量目 一個 二五匁(九四グラム)

一脇は八寸(二四センチ)間隔に一個、二脇は一尺(三〇センチ)、三・四脇は一尺二寸(三六センチ)間隔に一個を付ける。

㊧ 出網・入網の附属用具

- ① キンタマ石

量目 一貫目(三・七五キロ)位の自然石を着縄またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手綱に付け網の流れを調節する。

- ② チン(子エーの匙)

鎖用の鎖。各脇に三丁五個。増水時沈子手綱につけ手綱の振れを防ぐ。

- ③ カラツブ(カラブ。アイヌ語。さわる、触れるの意)

沈子手綱が振れないために、三尋(四・五メートル)に一個の割り合に付ける。(特に増

水時)

材質と作り方 材質 アドリ葦またはイタヤの若木。三〇センチ位の振して輪を作る。

作り方 焚火をし、周囲に棒を円形に立て若木を熱して丸く輪を作る。

- ④ ナデワラ 掛籠

沈子手綱が河底で障害物や砂泥底に減り込まないように(河底を滑りやすいようにするため)「籠」で被う。増水時にも取り付ける。

一〇センチ位に束ねて、四・五メートル置きに沈子手綱に巻きつける。

三 出網

径六分(二・八センチ)のロープ 長さ二〇尋(三〇メートル) 時によってはワイヤを使用することもある。

「石狩川鮭漁」の図解見

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図(図10)を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見えたものである。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

一 全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれている模様。山間は樺戸山地のピンネシリ(二一〇メートル)を中心に右に待根山(二〇二メートル) 隨根尻山(九七一メートル) 左に神居尻山(九四八メートル)と思われる(図10)。

遠景中央の船三隻は、川右岸菜礼(ライサツ)の漁場。左岸の三半船三、磯舟^{イソフネ}があるのは、左岸のトクビタにあった漁場で、現神威(ホリカムイ)付近(現本町地区仲町付近)ではないか。河岸から少し上がったところに樺木のようなものが茂っている。右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだろうか。

遠景中央に帆船三隻見えるのは石狩川河口と思う。従って手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。

二 所謂河川地引網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と史料する。二つに区切って摘要を述べる。

① 右絵。画面向かって右側部分。

地引網が手繰り上がり。大綱を清め(さやめ・ここでは鮭の選別作業)、漁夫が板倉(盆切場)に運ぶ様子(図11)。その左側では一人の漁夫が左手で網を清り(きより)修整している。三半船の艦では、船頭らしい人が艦樞を立てて持っている。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣廳七里石狩郡石狩廳」もう一面には「後隆驛江三里式拾壹町 錢園驛江五里拾町」とある。駅通の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

う。その先端につくのが入網側は入網(いりづな)、出網側を出網(でづな)という(図12)。この絵は入網を手繰っているところと思うが、網は川の中で途切れところにも繋がっていない。網の先にある磯舟の一人が、水中に手を入れているが、網の引き具合を見ているか、袋網の状態も見ているのか(図14)。あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。に磯舟の前が白くなっており、網に入った鮭がはねている様子を表現しているのだろう。

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かって消えている。網につながっていれば、地引網の最後の段階の絵になるのだが。

その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理している様子である(図13)。ただし、これも河川漁としては

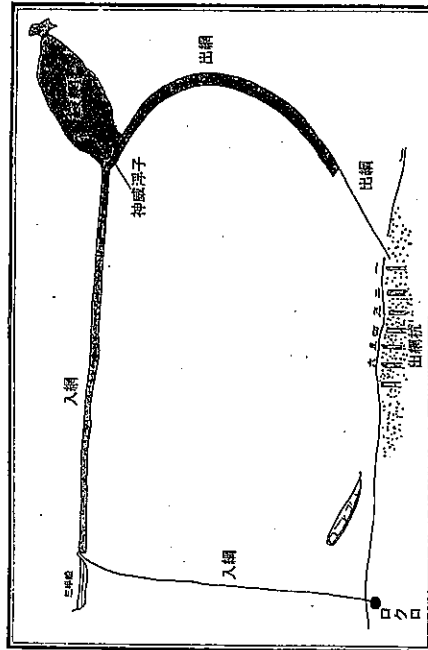


図12 河川での地曳網漁(北海道水産協会編1935を改変)

この標柱を挟んで一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振っている素振り、鮭の大漁を言んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。とくろを巻いているように見えるのは、引き網の入れ網か。ただし、河川漁の入網は、ふつう七〇尋(二〇五メートル)で、描かれている網は長すぎる。

手前に帽子を被り棒を持っている人物は羅卒(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと見料する。

② 左絵 網を引いている図

携わっているのは漁夫一人。長く描かれているようには思うが、網の左右の人数がほぼ同数となっている。実際は網の上部(アバタナ)は軽く、網の下部(アシタナ)が重い。(錘がついている)そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央(袋網の入り口)にある「神威浮子(カモイダンゴ)」から右側を入網(いりあみ)、左側を出網(であみ)とい

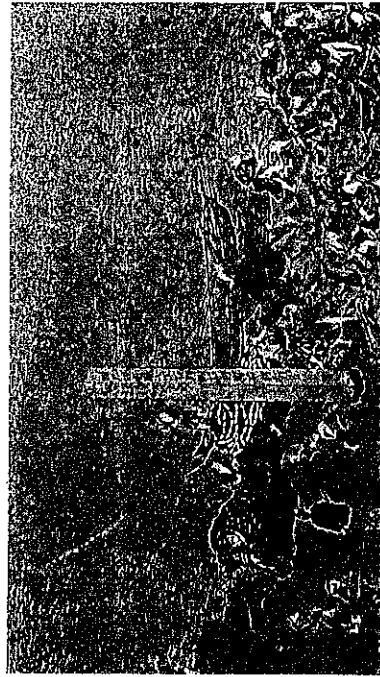


図11 鮭の清り(選別)



図13 浮子手網 (アハタチ)



図14 神威浮子 (カムイダンブ)



図15 ロクロでの巻き取り

網が長すぎる。一日に二三丁五河(回)も引網をするので、網を引いたまはから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

③ 入網をロクロで巻いている図

網掛船(三半船)で沖合に網をかけ、ロクロ(巻)で巻いている。一〇人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六〜七人で充分(図15)。

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りという。ロクロに二丁三廻りしてロープを手繰っているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタツ網は上がってこない。網は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながっている。実際の作業を良

く見て捕かれています。

ロクロ左の二隻の船(三半船)は網掛船。長い棒状のものは手繰。二丁一四人で掻く。二隻の船の罾は夫々、一本の棒が立っているが、先端に「ウタ」(罾の握りの部分)がついているところから罾籠(かご)と思われる。状況から船が動揺しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではこのようにすることはない(図16)。また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにすることはない。船の碇を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは海浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月〜一〇月〜二月であり、カモスがこのように高上りすることはない。ニシン漁期には(四月〜五月)には高上りする。その時は時化。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜

(川面)は産卵に遡上するので餌はとらない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない(図17)。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名称で、米軍将校についたが、この将校は、鮭を釣ろうとし



図16 船の罾籠



図17 鮭を釣る人

た。自分は絶対釣れないと忠告したが、「俺はミシシッピー川で鯉を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかった。やはり一匹も釣れなかった。鯉はウタイではないか。画面中央に、釣竿を持った子供が描かれているが、連れの子供は桶をもっており、これはウタイでよいだろう。でも、先の鯉は鯉である。あるいは未成熟のサケかも知れない。荷を担ぎコウモリ傘を持っているのは旅行者か行商か。行商としては荷物が少ない。



図18 髷のある人物

右側に毛皮の胴着のようなものを着た髷を結っている男が見える。漁の監督だろうか。その他にも髷を結っているように見える人物が何人もいる。軟髪脱刀令は、明治四年で発布で、明治一〇年代になっても髷のある人がいたのだろうか(図18)。

④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なった作業をしているように見える(図19)。

ア 画面右側端の三平船は、網掛(網を仕掛けること)をしていると思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に打った杭(出網杭)に固定し、出網、袋網、入網の順に網を張る。この三平船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながった網を引く張っているものと見られる。

イ 次の磯船には、駅通の標柱付近から網が出て、ロクロにつながっている。磯船の場所に袋

網があるのだろう。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがって、ロクロに近い位置を変えてゆく。イの網掛の次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が磯舟にもどこにもつながっていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かって何か叫んでいるように見える。こうした作業は見たことがない。岸が上がってくる鯉を網に向かって追い返しているのだろうか。

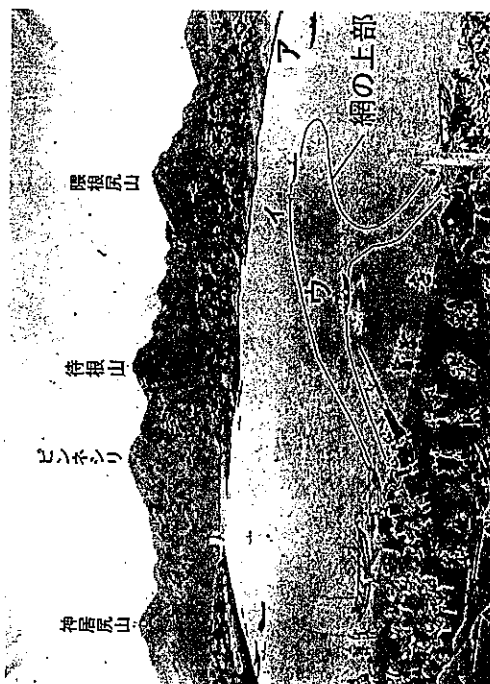


図19

三 「石狩山鯉漁」の図の虚実

全体として見ると、一枚の絵で網掛、曳網の一連の作業を描いてあり大変貴重なもの。個々の作業についても良く理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思う。

① 網の数

絵の中には、網掛、網引きなど異なる作業をする網が三本描かれているが一ヶ所の漁場で、同時にこのような作業をすることはない。一連の作業を示すための演出だろう。

② 網の規模

最初に見たときに海浜漁の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。

石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで栄えた街」として知られていた。しかし時代の推移によつて街の中心は花畔、樽川（花川）地区に移り、今日では舟天歴史通りや石狩浜海水浴場あそび場、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海水面に於ける定置網漁の一漁法のみによつて操業されているが、昭和三〇年までは、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法の外に、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ孵化事業のため五場所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として観光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

一 漁業の名称

石狩川鮭地曳網漁

二 漁獲物の種類

鮭

三 漁業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

四 操業期間

走り漁 自九月一日 至一〇月三十一日

後取り漁 自一月二十五日 至二月末日

五 操業場所 石狩川

大正後期から昭和三〇年まで

- 一 ヤウスバ場所 廃止 昭和初期
- 二 上島笠 〃 〃 昭和六年頃
- 三 下島笠 〃 (渡船場上) 廃止 昭和三年

注 昭和一五年〜同一八年まで地曳網名義で日中、二隻の磯舟で流網漁を行う。

昭和三〇年前半、漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四・五年で中止。

- 四 若生 場所 (渡船場下) 廃止 昭和五年
- 五 郷神 場所 (呼称ホリカムイ) 〃 昭和三〇年
- 六 来札 場所 (中州) 〃 大正末期

注 左岸昭和七・八年頃再開したこともある。

- 七 燈台下場所 廃止 昭和四年頃

2

六 漁具の状況

これについては、漁場（川幅・水流・流れの強弱）によって、網丈・長さに相違あり。

本項では福神殿場所を基準とする。

昭和一〇年代

地曳網は出網、袋網（ヌド）、入網（他出網・入網）からなる全長一五二尋（三二八メートル）によって構成されている。一脇即ち袋網に連接するところの網丈は、七尋（一〇・五メートル）、袋網（ヌド）は太三本子、二寸八分（八・四センチ）長さ八尋三尺（二二・九メートル）袋底に魚を追いつめて開放するため先端を網（ロープ）で結び、その網を一〇尋（二五メートル）程度としその最先端浮子（神威浮子）を付け目印とする。（曳網の中心を一目で判別出来るため）

一 出網

長さ五六尋（八四メートル）、網丈七尋（一〇・五メートル）河水の増水によって二脇部をはすす。

(一) 一脇、太三本子、三寸目（九センチ）長さ二四尋（三六メートル）

(二) 二脇、太三本子、四寸目（一二センチ）長さ三三尋（四八メートル）

① おは浮子たな手網（径五分（一・五センチ）のロープ）

② メクグリ 径二分五厘（〇・四五センチ）麻糸。一割の香せを入れ上下共同に長さにする。

③ おし手網 手網径五分五厘（一・六五センチ）のロープ。

④ 浮子（昭和一〇年頃、横町加藤厩屋で作成）

木製（楡材）長さ一尺四寸（四二センチ）幅四寸（一二センチ）厚さ、中真一寸四分（四・二センチ）両端五分（一・五センチ）その両端に穴を開け「アバ」をこれに通しておし手網に結びつける。

一脇は八寸（二四センチ）間に隔て、一枚付け、二脇は九寸（二七センチ）一尺二寸（三六センチ）に一枚付ける。

(三) おし手網の沈子

網尾は鉛製で一個、量目二五匁（〇・九キロ）之を一脇八寸（二四センチ）間隔に一個、二脇は一尺（三〇センチ）間隔に一個を付ける。

(四) 筋縄 径三分（〇・九センチ）の麻縄。長さ四尋（六メートル）を用いる。

(五) 立網 上網は径六分（一・八センチ）のロープ。

長さ三尋（四・五メートル）で浮子手網に連なり、下網は径六分のロープで長さ五尋（七・五メートル）おし手網に連なる。この量網を「ツボ」に含す。

二 入網

長さ九六尋（一四四メートル）網丈七尋（一〇・五メートル）

(一) 一脇から四脇まであり、長さ夫々二四尋（三六メートル）網目、一脇太三本子三寸目（九センチ）二脇太三本子 四寸目（一二センチ）三脇、四脇共三本子 五寸目（一五センチ）

寸)とする。

- ① 浮子手網 径五分(一・五センチ)のロープ。
- ② 沈子手網 径四分(一・二センチ)のロープ。
- ③ メクグリ 径二分五厘(〇・四五センチ)の麻糸。

一割の贅せを入れて上下共同し長さとする。

注 河水の増水で三・四脇をはすす。

- ④ 浮子 出網と同じ。

(一) 網足 鉛製 量目 一個 二五匁(九四グラム)

一脇は八寸(二四センチ)間隔に一個、二脇は一尺(三〇センチ)、三・四脇は一尺一寸(二六センチ)間隔に一個を付ける。

(二) 出網・入網の附属用具

- ① キンタマ石

量目 一貫目(三・七五キロ)位の自然石を荒縄またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手網に付け網の流れを調節する。

- ② チン(チェーンの訛)

鑄用の鋳。各脇に三〜五個。増水時沈子手網につけ手網の振れを防ぐ。

- ③ カラップ(カラブ。アイヌ語。ちわる、触れるの意)

沈子手網が振れないために、三尋(四・五メートル)に一個の割りに付ける。(特)に増

水時)

材質と作り方 材質 ブドノ草またはイタヤの若木。三〇センチ位の板して輪を作る。

作り方 焚火をし、周囲に樺を円形に立て若木を熱して丸く輪を作る。

- ④ ナアアラ 撫籠

沈子手網が河底で障害物や砂泥底に減り込まないように(河底を滑りやすいようにするため)一尋で敷く。増水時にも取り付ける。

一〇センチ位に束ねて、四・五メートル置きに沈子手網に巻きつける。

三 出網

径六分(一・八センチ)のロープ 長さ二〇尋(三〇メートル) 時によってはワイヤーを使用することもある。

「石狩川鮭漁」の図瞥見

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図(図10)を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見えたものである。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

一 全体の構成と遠景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遠景について述べ、次に近景について触れる。

遠景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれてる模様。山間は樺戸山地のドンネシリ(二一〇メートル)を中心に右に待根山(二〇〇二メートル) 隠根尻山(九七一メートル) 左に神居尻山(九四八メートル)と思われる(図10)。

遠景中央の船二隻は、川右岸来札(ライサツ)の漁場。左岸の三半船三、磯^{イソ}共^{トモ}があるのは、左岸のトクビタ^{トクビタ}にあった漁場で、廻神威(ホリカムイ)付近(現本町地区仲町付近)ではないか。河岸から少し上がったところに樺木のようなものが茂っている。右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギがハマナスだろうか。

遠景中央に帆船船二隻見えるのは石狩川河口と思う。従って手前が上流。上段は鳥瞰図の様に見える。

二 所謂河川地引網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と異料する。二つに区切って摘要を述べる。

① 右絵。画面向かって右側部分。

地引網が手繰り上がり。大網を清め(さやめ、ここでは鮭の選別作業)、漁夫が板倉(塩切場)に運ぶ様子(図11)。その左側では一人の漁夫が左手で網を清り(きより、修繕)している。三半船の艦では、船頭らしい人が艦樞を立てて持っている。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣廳七里石狩國石狩郡石狩驛」もう一面には「後路驛江三里式拾壹町 鐵頭驛江五里拾町」とある。駅廻の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

う。その先端につくのが入網側は入網(いりづな)、出網側を出網(でづな)という(図12)。この絵は入網を手繰っているところと思うが、網は川の中で途切れどこにも繋がっていない。網の先にある磯舟の一人が、水中に手を入れているが網の引き具合を見ているか、袋網の状態も見ているのか(図14)。あるいは、神威浮子を引き上げて袋網に鮭を入れようとしているのかもしれない。に磯舟の前が白くなっており、網に入った鮭がはねている様子を表現しているのだろう。

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かって消えている。網につながっていれば、地曳網の最後の段階の絵になるのだが。

その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理している様子である(図13)。ただし、これも河川漁としては

② 左巻。網を引いている図

携わっているのは漁夫二人。良く描かれているように思うが、網の左右の人数がほぼ回数となっている。実際は網の上部(アバタナ)は軽く、網の下部(シタナ)が重い。(錘がついている)そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央(袋網の入り口)にある「神威浮子(カモイダンブ)」から右側を入網(いりあみ)、左側を出網(であみ)とい

この標柱を挟んで一人は鮭を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振っている素振り、鮭の大漁を喜んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。とくろを巻いているように見えるのは、引き網の入網側。ただし、河川漁の入網は、ふつう七〇尋(二〇五メートル)で、描かれている網は長すぎる。

手前に帽子を被り棒を持っている人物は羅年(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと史料する。

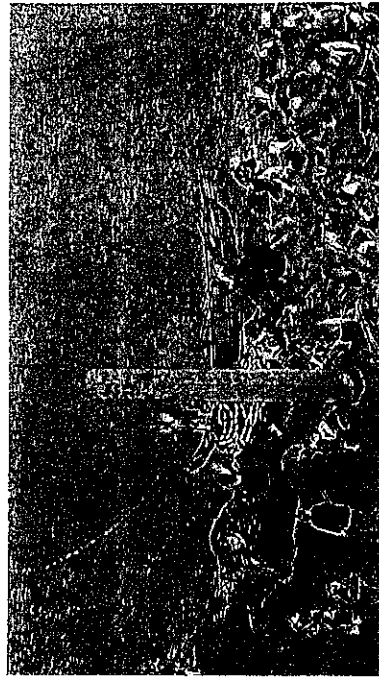


図11 鮭の釣り(選別)

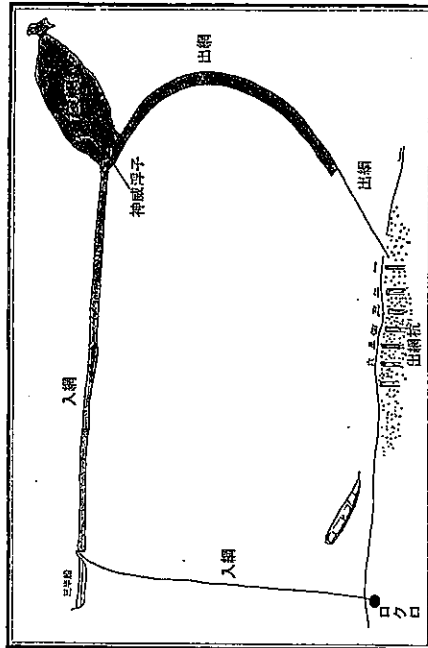


図12 河川での地曳網漁(北海道水産協会編1935を改変)

く見て描かれている。

ロクロ左の二隻の船(三半船)は網掛け船。長い棒状のものは手櫂。二二〜二四人で掻く。二隻の船の櫓は夫々、一本の棒が立っているが、先端に「ウタ」(櫂の握りの部分)がついているところから櫓樞と思われる。状況から船が動揺しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではこのようにすることはない(図16)。また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにすることはない。船の碇を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは海浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月〜十月〜二月であり、カモメがこのような高上りすることはない。ニシン漁期には(四月〜五月)には高上りする。その時は時化。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜(川面)は産卵に遡上するので餌はとらない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない(図17)。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名称で、米軍将校についたが、この将校は、鮭を釣ろうとし



図16 船の櫓樞



図17 鮭を釣る人



図13 浮子手網 (アバタチ)



図14 神威浮子 (カムイダンプ)



図15 ロクロでの巻き取り

網が長すぎる。一日に二〜三〜五河(回)も引網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

③ 入網をロクロで巻いている図

網掛け船(三半船)で沖合に網をかけ、ロクロで巻いている。一〇人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六〜七人で充分(図15)。

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りという。ロクロに二〜三廻りしてロープを手繰っているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタツ網は上がってこない。網は、磯舟につながり、さらに磯舟から岸につながっている。実際の作業を良

た。自分は絶対釣れないと警告したが、「俺はミシシヅビ一川で鯉を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかった。やはり一匹も釣れなかった。絵はウグイではないか。画面中央に、釣竿を持った子供が描かれているが、連れの子供は桶をもっており、これはウグイでよいだろう。でも、先の絵は鯉である。あるいは未成熟のサケかも知れない。荷を担ぎコウモリ傘を持っているのは旅行者か行商か。行商にしては荷物が少ない。

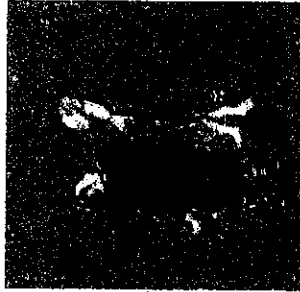


図 18 髻のある人物

右側に毛皮の胴着のようなものを着た髻を結っている男が見える。漁の監督だろうか。その他にも髻を結っているように見える人物が何人もいる。散髪腕刀令は、明治四年で発布で、明治一〇年代になっても髻のある人がいたのだろうか(図18)。

④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なった作業をしているように見える(図19)。

ア 画面右側端の三半船は、網掛(網を仕掛けること)をしていると思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に打つた杭(出網杭)に固定し、出網、袋網、入網の順に網を張る。この三半船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながった網を引っ張っているものと見られる。

イ 次の磯船には、駅邊の標柱付近から網が出て、ロクロにつながっている。磯船の塹所に袋

網があるのだろう。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがつて、ロクロに近い位置を変えてゆく。イの網掛の次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が磯舟にもどこにもつながっていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かって何か叫んでいるように見える。こうした作業は見ることがない。岸に上がってくる鯉を網に向かって追い返しているのだろうか。



図 19

三 「石狩川鮭漁」の図の虚実

10

全体として見ると、一枚の絵で網掛、曳網の一連の作業を描いてあり大変貴重なもの。個々の作業についても良く理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思う。

① 網の教

絵の中には、網掛、網引きなど異なる作業をする網が三本描かれているが一ヶ所の漁場で、同時にこのような作業をすることはない。一連の作業を示すための演出だろう。

② 網の規模

最初に見たときに海浜漁の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。

石狩川河口に於けるサケ地曳網漁回顧

はじめに

石狩市本町地区はそのむかし「サケに始つてサケで栄えた街」として知られていた。しかし時代の推移によって街の中心は花畔、樽川（花川）地区に移り、今日では弁天歴史通りや石狩港海水浴場あそびーち、温泉施設などを中心とする観光街となり訪れる人々の憩いの地と変貌している。

今日、鮭漁は海水面に於ける定置網漁の一漁法のみによって操業されているが、昭和三〇年までは、石狩川の内水面漁が行われておりこの漁法のほかに、地曳網、流網、刺網三漁法が行われていた。今回本稿で取上げる地曳網漁は、内水面鮭流網、刺網漁禁止後も石狩川内水面のサケ解化事業のため五塚所の地曳網が認められ、昭和四〇年まで継続した漁法である。その後、平成一四年北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業としてホリカムイで復活した。この漁法は江戸時代から続く伝統漁であり、石狩の風物詩として観光的にも有名で親しまれてきたものであることから、そのうちの大正期以降の漁の概要について述べることにしたい。

一 漁業の名称

石狩川鮭地曳網漁

二 漁獲物の種類

三 鮭

三 漁業免許

鮭特別定第〇〇号北海道庁

四 操業期間

走り漁 自九月一日 至一〇月三十一日

後取り漁 自二月二十五日 至二月末日

五 操業場所 石狩川

大正後期から昭和三〇年まで

- 一 ヤウスバ場所 廃止 昭和初期
- 二 上貞寧 〃 〃 昭和六年頃
- 三 下貞寧 (渡船場上) 廃止 昭和三年

注 昭和一五年―同一八年まで地曳網名義で日中、一隻の磯舟で流網漁を行う。

昭和三〇年前半、漁組内に共同組合設立して地曳網漁一ヶ統再開。四・五年で中止。

四 若生 場所 (渡船場下) 廃止 昭和一五年

五 堀神威場所 (呼称ホリカムイ) 〃 昭和三〇年

六 来礼 場所 (中州) 〃 大正末期

注 左岸昭和七・八年頃再開したこともある。

七 燈台下場所 廃止 昭和四年頃

八 志業 場所 〃 明治後期



六 漁具の状況

これについては、漁場（川幅・水流・流れの強弱）によって、網丈・長さに相違あり。

本項では福神威場所を基準とする。

昭和一〇年代

地或網漁は出網、袋網（スド）、入網（他出網・入網）からなる全長二五二尋（三三八メートル）によって構成されている。一脇即ち袋網に連接するところの網丈は、七尋（一〇・五メートル）、袋網（スド）は太三本子、二寸八分（八・四センチ）長さ八尋三尺（二二・九メートル）袋底に魚を追いつめて開放するため先端を網（ロープ）で結び、その網を一〇尋（二五メートル）程度とし、その最先端浮子にを付ける。袋網の位置に鳥帽子型の浮子（神威浮子）を付け目印とする。（曳網の中心を一目で判別出来るため）

一 出網

長さ五六尋（八四メートル）、網丈七尋（一〇・五メートル）河水の増水によって二脇部ははずす。

- (一) 一脇、本三本子、三寸目（九センチ）長さ二四尋（三六メートル）
- (ロ) 二脇、太三本子、四寸目（一二センチ）長さ三三尋（四八メートル）
 - ① あは浮子たる手網 径五分（一・五センチ）のロープ。
 - ② メククリ 径二分五厘（〇・四五センチ）麻糸。一割の寄せを入れ上下共同し長さにする。
 - ③ 沈子手網 手網径五分五厘（一・六五センチ）のロープ。

④ 浮子（昭和一〇年頃、横岡加藤補屋で作成）

木製（榎杣）長さ一尺四寸（四二センチ）幅四寸（一二センチ）厚さ、中真一寸四分（四・二センチ）西端五分（一・五センチ）その西端に穴を開け「アバ」をこれに通して浮子手網に結びつける。
一脇は八寸（二四センチ）間に隔て、一枚付け、二脇は九寸（二七センチ）一尺二寸（三六センチ）に一枚付ける。

(三) 沈子手網の沈子

網足は鉛製で一個、量目二五匁（〇・九キロ）之を一脇八寸（二四センチ）間隔に一個、二脇は一尺（三〇センチ）間隔に一個を付ける。

(四) 筋縄 径三分（〇・九センチ）の麻縄。長さ四尋（六メートル）を用いる。

(五) 立網 上網は径六分（一・八センチ）のロープ。

長さ三尋（四・五メートル）で浮子手網に連なり、下網は径六分のロープで長さ五尋（七・五メートル）沈子手網に連なる。この量綱を「ツボ」に合す。

二 入網

長さ九六尋（一四四メートル）網丈七尋（一〇・五メートル）

- (一) 一脇から四脇まであり、長さ未々二四尋（三六メートル）網目、一脇太三本子三寸目（九センチ）二脇太三本子 四寸目（一二センチ）三脇、四脇共三本子 五寸目（一二・五センチ）とする。

- ① 浮子手網 径五分（一・五センチ）のロープ。

② 沈子手綱 径四分(二・二センチ)のロープ。

③ メクグリ 径一分五厘(〇・四五センチ)の麻糸。

一割の寄せを入れて上下共同し長さとする。

注 河水の増水で三・四脇をはずす。

④ 浮子 出網と同じ。

㊦ 綱足 鉛製、晝目 一個 二五匁(九四グラム)

一脇は八寸(二四センチ)間隔に一個、二脇は一尺(三〇センチ)、三・四脇は一尺二寸(三六センチ)間隔に一個を付ける。

㊧ 出網・入網の附属用具

① キンタマ石

晝目 一貫目(三・七五キロ)位の自然石を荒縄またはロープで巻き増水時や干潮時に沈子手綱に付け網の流れを調節する。

② チン(チェーンの訛)

鍍用の鋳。各脇に三・五個。増水時沈子手綱につけ手綱の振れを防ぐ。

③ カラップ(カラフ。アイヌ語。さわる、触れるの意)

沈子手綱が振れないために、三尋(四・五メートル)に一個の割り金を付ける。(特に増水時)

材質と作り方 材質 ブドノ草またはイタヤの若木。三〇センチ位の振じて輪を作る。作り方 焚火をし、周囲に棒を円形に立て若木を熱して丸く輪を作る。

④ ナテワラ 撫葉

沈子手綱が河底で障害物や砂泥底に減り込まないように(河底を滑りやすいようにするため)一匁二で被る。増水時にも取り付ける。

一〇センチ位に束ねて、四・五メートル巻きに沈子手綱に巻きつける。

三 出網

径六分(二・八センチ)のロープ 長さ二〇尋(三〇メートル) 時によってはワイヤーを使用することもある。

「石狩川鮭漁」の図解見

以下に述べるのは、北海道大学フィールド科学センター植物園所蔵「石狩川鮭漁」の図(図10)を石狩川河口鮭漁に携わった元漁師の目で見たと見られる。そのため、漁業史の専門家から見ると異なる見解があるかもしれない。あくまでも石狩の鮭漁に携わった者の解釈としてご理解いただきたい。

一 全体の構成と遺景

この絵を見ると石狩川河口の風景を背景に、海浜での鮭地曳網漁が描かれているように感じた。その理由は後で述べる。最初に遺景について述べ、次に近景について触れる。

遺景に描かれた山並みは、左岸の本町地区からの風景が描かれている模様。山間は樺戸山地のピンネシリ(二一〇メートル)を中心に右に待根山(一〇〇メートル) 隈根尻山(九七二メートル) 左に神居尻山(九四八メートル)と思われる(図10)。

遺景中央の船三隻は、川右岸菜札(ライサツ)の漁場。左岸の三半船三、磯舟^(イソフネ)があるのは、左岸のトクビタにあった漁場で、混神威(フリカムイ)付近(現本町地区仲町付近)ではないが、河岸から少し上がったところに灌木のようなものが茂っている。右岸側はカシワだろうが、左岸側の河口近くにカシワ林はない。ヤナギかハマナスだろうか。

遺景中央に帆前船二隻見えるのは石狩川河口と思う。従って手前が上流。上段は鳥瞰図の様に

見える。

二 所謂河川地引網漁の様子

下段絵・近景は、海浜漁の様子と史料する。二つに区切って摘要を述べる。

① 右絵。画面向かって右側部分。

地引網が手繰り上がり。大綱を清めさやめ。ここでは鮭の選別作業、漁夫が板倉(塩切場)に運ぶ様子(図11)。その左側では一人の漁夫が左手で綱を滑り(きより・修繕)している。三半船の艦では、船頭らしい人が艦樞を立てて持っている。

高い四角中の柱には、一面に「札幌縣廳七里石狩國石狩郡石狩町」もう一面には「篠路驛江三里武拾管町 鐵函驛江五里拾町」とある。駅通の標柱である。



図10 「石狩川鮭漁」の図

この標柱を挟んで一人は鯉を顔に当て、他の一人は歌舞伎役者のように手を振っている素振り、は、鯉の大漁を喜んでいる漁夫の姿と作業の様子が表現されたものと思われる。とくろを巻いているように見えるのは、引き網の入れ網か。ただし、河川漁の入網は、ぶつう七〇等(二〇五メートル)で、描かれている網は長さ^{ほゞ}異なる。

手前に帽子を被り棒を持っている人物は羅卒(明治時代の警察官)。海辺に手を広げ、磯舟の前に二人立っている人は服装からアイヌと思料する。

② 左絵。網を引いている図

携わっているのは漁夫二人。良く描かれているように思ふが、網の左右の人数がほぼ同数となっている。実際は網の上部(アバタナ)は軽く、網の下部(アシタナ)が重い。鯉がついて、そのため下部に多くの人数がつく。地曳網は、中央(袋網の入り口)にある「神威浮子(カモイタン)」から右側を入網(いりあみ)、左側を出網

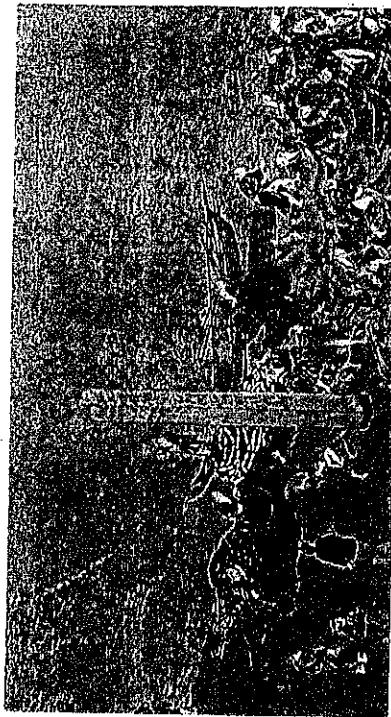


図11. 鯉の清り(選別)

(であみ)という。その先端につくのが入網側は入網(いりづな)、出網側を出網(でづな)という(図12)。この絵は入網を手繰っているところと思ふが、網は川の中で途切れどこにも繋がっていない。網の先にいる磯舟の一人が、水中に手を入れているが、網の引き具合を見ているか、袋網の形状も見ているのか(図13)。あるいは、神威浮子を引上げて袋網に鯉を入れようとしているのかもしれない。に磯舟の前が白くっており、網に入った鯉がはねている様子を表現しているのだろう。

しかし、この磯舟から出た入網は、この絵の網にはつながらず、岸に向かって消えている。網につながっていれば、地曳網の最後の段階の絵になるのだが。

その左側に描かれているのは全く別な動作で、引き上げられた網を整理している様子である(図13)。ただし、これも河川漁と

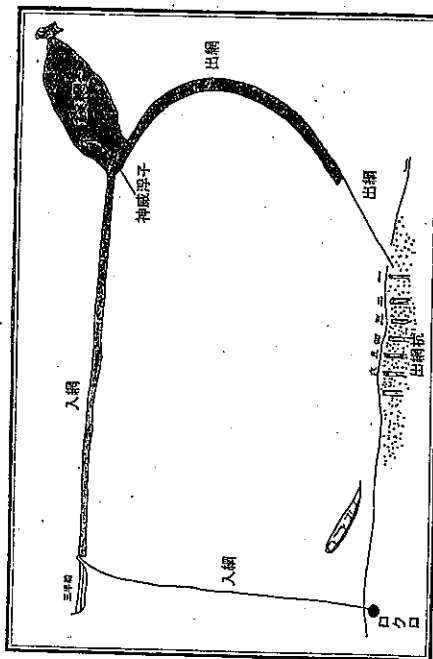


図12 河川での地曳網漁(北海道水産協会編 1935を改変)



図13 浮子手網 (アバタチ)



図14 神威浮子 (カムイダンブ)



図15 ロクロでの巻き取り

しては網が長すぎる。一日に三〜五回(回)も引網をするので、網を引いたそばから船に積んで、次の漁の準備をする。絵にあるように陸で網を山にしているのは、網が長く漁の回数が少ない海浜漁の様子ではないか。

③ 入網をロクロで巻いている図

網掛船(三半船)で沖合に網をかけ、ロクロで巻いている。一〇人いるが、河川漁としては多い。網が短い河川漁では六〜七人で充分(図15)。

ロクロの横で一人の漁夫がロープを手繰っているが、これは捨て取りという。ロクロに二〜三廻りしてロープを手繰っているが、一人専門にロープを手繰る捨て取りがいなければタツプ網は上がってこない。網は、機舟につながり、さらに機舟から岸につながっている。実際の作業を良く見て描かれている。

ロクロ左の二隻の船(三半船)は網掛船。長い棒状のものは手櫂。二〜四人で撞く。二隻の船の櫂は夫々、一本の櫂が立っているが、先端に「ウタ」(櫂の握りの部分)がついているところから櫂樞と思われる。状況から船が動揺しないように立て固定しているように見えるが、自分の経験ではこのようにすることはない(図16)。また、船が川に上げられているが、川であれば、このようにすることはない。船の櫂を下ろして泊めるだけである。岸に上げるのは海浜でのやり方に見える。

鮭漁は九月〜一〇月、十一月であり、カモメがこのように高上りすることはない。ニシン漁期には(四月〜五月)には高上りする。その時は時化。

鮭を釣っている人がいるが石狩浜(川面)は産卵に潮干するので餌はとらない。従って、他の海域では昔から釣れるが石狩浜では釣れない(図17)。

戦後、進駐軍の将校が石狩にヨットハーバーを作った。自分は警備補助員という名称で、米軍将校についたが、この将校は鮭を釣ろうとした。自分は絶対釣れないと申告したが、「俺はミシシッピ川で鮭を釣った。(だから石狩でも釣れる)」と聞かなかった。やはり一匹も釣れなかった。絵は



図16 船の感嘆



図17 鮭を釣る人

ウグイではないか。画面中央に、釣竿を持った子供が描かれているが、連れの子供は桶をもっており、これはウグイでよいだろう。でも、先の絵は鯉である。あるいは未成熟のサケかも知れない。荷を担ぎコウモリ傘を持っているのは旅行者か行商か。行商にしては荷物が少ない。

右側に毛皮の胴着のようなものを着た髷を結っている男が見える。漁の監督だろうか。その他にも髷を結っているように見える人物が何人もいる。散髪脱刀令は、明治四年で発布で、明治一〇年代になっても髷のある人がいたのだろうか(図18)。

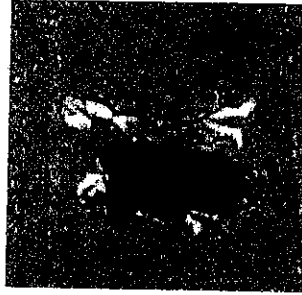


図18 話のある人物

④ 川中の漁

川中に何艘も船が描かれているが、それぞれ異なる作業をしているように見える(図19)。

ア 画面右側端の三平船は、網掛(網を仕掛けること)をしていると思われる。地曳網をおこなう際、網の一方から出た網を岸に打った杭(出網杭)に固定し、出網、袋網、入網の順に網を張る。この三平船の後が少し白く波立っているが、これは、岸につながった網を引く張っているものと見られる。

イ 次の磯船には、駅通の標柱付近から網が出て、ロクロにつながっている。磯船の場所に袋網があるのだろうか。岸につなげる出網は、網を巻き取るにしたがって、ロクロに近い位置を移してゆく。イの網掛の次の段階の状態である。

ウ ロクロの右側には、網を引いている様子が描かれている。地曳網の最後の段階である。ただし、既に書いたが、この網は出網側が磯舟にもどこにもつながっていないおかしな状態である。

岸に立っている人物が、両手を上げて川に向かって何か叫んでいるように見える。こうした作業は見たことがない。岸に上がってくる鯉を網に向かって追い返しているのだろうか。

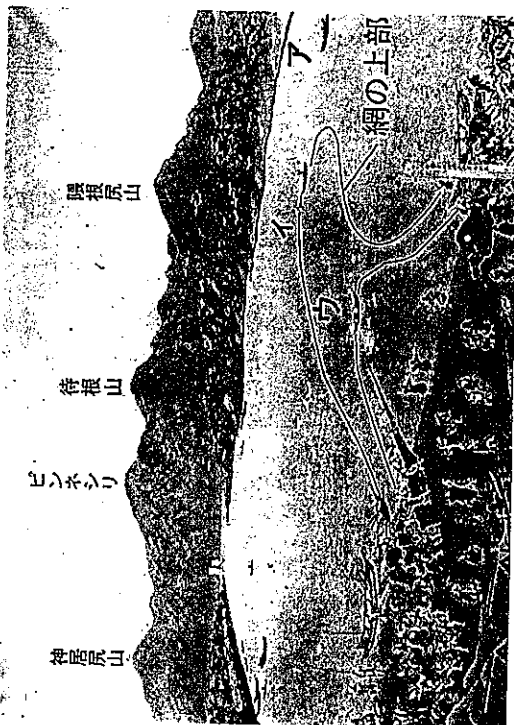


図19

三 『石狩川鯉漁』の図の風景

全体として見ると、一枚の絵で網掛、曳網の一連の作業を描いてあり大変貴重なもの。個々の作業についても良く

理解して描けている。しかし、絵なるが故に若干誇張があると思う。

10

① 網の数

絵の中には、網掛、網引きなど異なる作業をする網が三本描かれているが、一ヶ所の漁場で同時にこのような作業をすることはない。一連の作業を示すための演出だろう。

② 網の規模

最初に見たときに海浜漁の様子が描かれているのではないかとの印象を持った。